

スーパー伝奇バイオレンス

菊地秀行

944

945

946

947

魔殺指鬼



光文社文庫

スーパー伝奇バイオレンス

魔殺指鬼

著者 菊地秀行

2003年7月20日 初版1刷発行

発行者 八木沢一寿
印刷 萩原印刷
製本 榎本製本

発行所 株式会社光文社
〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
電話 (03)5395-8149 編集部
8114 販売部
8125 業務部
振替 00160-3-115347

© Hideyuki Kikuchi 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73523-1 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

スーパー伝奇バイオレンス

ま さつ し き
魔殺指鬼

ひで ゆき
菊地秀行



光文社

目次

“指殺”を持つ男

地底に眠る主人

継ぐものたち

白い肌の夜

邪鬼を食らう男

妖しきコンビの影

触手淫泉

外道哄笑

栽培場の怪

あとがき

解説 末國善己

299 295 256 223 192 160 129 108 67 35 5

“指殺”を持つ男

1

京都。

初秋である。そのはじめ。古えの都で現代を生きる人々が、他国からの引率者付きの若者たちに、軽く眉をひそめるには、まだ間がある。

それでも、この国随一の観光都市の街路には、スーツ姿に通訳付きの外国人VIPから、ジーンズにすり切れたバックパックを肩にした若者まで、おびただしい旅人たちが足音をたてていた。彼らの息づかいとその足音が、何処よりもせわしなく交錯する場所——四条河原町。

言うまでもなく、京都最大の繁華街である。クラブ、バー、飲み屋が軒を並べ、酔った眼で見廻せば、ふと、何処の都市にでもある飲み屋の横丁と誤解してしまいそうだが、この街に限ってそんなことはない。

その家並み、細く短い小路、風にゆれるしだれ柳の葉にも、古都の香りと色は或いは鮮やかに、或いはつつましげに息づいて、酔漢に自らの居場所を気づかせずにはおかない。

蒼茫と日も暮れかかった夕刻のことである。

堺通りの西にある路地で、小さな騒ぎが生じた。

この路の中ほどに、小さな古井戸がひとつある。普段は鉄の丸蓋が被せてあるし、そもそも、そんな古くさい井戸に眼を止めるものもないのだが、このときに限って、近所の子供たちの気を引きつけたらしい。

落っこちる水音をきいたものはいなかったが、子供の泣き声に、小路の向うを通りかかった観光客のひとりが気づき、すぐ、近くの飲み屋へ駆けこんだ。

泣きじゃくっているのは、すべて近所の子で、五歳の男の子が二人と、四歳の女の子、不運な子は同じ四歳の男児で、井戸から二十メートルと離れていない神社のひとり息子であった。

飲み屋の主人が現場へ駆けつけて井戸を覗きこむと、もはや黒い水の中に、白っぽい形が蠢いている。声をかけても返事がなく、ついてきた観光客に、店にいる妻に一一〇番するように頼み、自ら救出に赴くことにした。

幸い、井戸の脇には救助用のロープが詰まった救助函が常備されており、主人はこれを巻いて井戸の中へ下り、子供を救出した。ロープの端を持ったのは、観光客と、主人の妻の呼

びかけに応じて集まった子供たちの親をはじめとする近所の住人であった。

主人の話によると、水面に達したとき、子供の姿はすでになく、自分も首まで水に漬かり、水中を手探りした。駄目なら潜っても探すつもりだった。黒い水はひどく冷たかったという。たった一度で、子供の身体からだを——まるで、待ちかねていたように——広げた指の中に感じたときは涙が出た。

呼吸いきはしていないが身体は温かい。

これは助かるぞ、と大急ぎで引き上げてもらい、石畳の上に横たえて人工呼吸を施した。十秒としないうちに反応があつた。

少し遅れて救急車が到着したとき、子供は母親に抱きついてすすり泣いており、救急隊員が念のため病院へ運ぼうとすると、激しく泣きじゃくって拒否の様子を見せた。

これが却かえつて、元気だとの印象を隊員に与えたのである。

救急車は引き返し、母親はみなに礼を言つて、我が子を抱きかかえたまま、家へ戻ろうと小路を歩き出した。

五、六歩行つたところで、

「お待ちなさい」

と声がかかった。

ふり向いて、母親は硬直した。身体の奥が妖あやしく疼うずんでいる。ここ十何年も感じたことの

ない血のざわめきであった。

二つの人影が高辻通りの出入口を背に立っていた。

小柄な方に見覚えがあった。息子が落ちたのに気づいて、飲み屋へ連絡してくれた観光客である。

そのときも感じたが、今になると奇妙な風体がひとときわ眼を引く。

黒い皿の上にお椀わんを伏せたようなボーラー・ハットを被り、同じ黒のインパネスをまとっている。ふつう黒を着ると締まって見えるものだが、こちらは、まるで饅頭まじゅうみたいになっぶりと広がり、よくもこんな小路に入ってこられたなどの印象さえ与える。

帽子の下の顔は丸型のサングラスとマフラーに隠れてよくわからないが、全身から漂う不思議な貫禄は、決して悪いものではなかった。

その後ろに立つもうひとつの人影——母親の頬を紅く染め、心搏数を増幅させたのは、こちらの方だろうか——は、ボーラー・ハットのインパネス姿が横幅のせいで実物以上に小柄に見えるため、これはまるで桁外れけたはずの長身じみており、母親は陶然と見上げてしまった。陶然、というには訳がある。小柄な方は、服装や、片手に妙にひん曲がったステッキについているところから、かなりの年配と思えたが、オリーブ・ブラウンのトレンチコートを着こなした長髪の顔は、こんないい男がこの世の中に、と身震いしたくなるほどの美男なのであった。

しかし、常識から判断すれば、極めて妖異な——状況をステアすれば——奇っ怪な二人組と言つてもいい。それを、頭の芯しんまで桃色に染まった母親は、少しも異常と感ぜないのであつた。

茫然ぼうぜんと、若い男の方を眺めているうちに、

「失礼ながら、そのお子さん——治療させていただけませんか？」

と言う声がきこえた。それが、小柄な方の男が口にしたものだど気づいたとき、若い男がすつと前へ出て、息子を抱き取つていた。

「あ……あの……」

さすがに止めようとするのを、

「ご安心なさい」

と小柄な方の男が、野太い声で制した。

「これも何かのご縁だ。偶然とはいえ、こんなところで私たちに会おうとは——と言つても、こいつはいま、駆けつけてきたばかりですが——仏の導きと言うべきでしょうな。失礼ながら、お二人の身体から靈気みたいなものが漂ってくるが、ご家庭は？」

「あの——神社を」

答えてから、どうして、と思つた。

「やはり。——よほど靈格の高いご神域でしょうな。もつとも、だからこそ、狙われたわけ

ですが」

「狙われた？」

どういう意味かと訊く前に、男は若者の方へ眼をやった。

奇妙なことに、彼は膝を折り、石畳の上に正座していたのである。子供はその両腿を横断する形で、仰向けに寝かされていた。

救急車に乗るのは、あれほど嫌がったのに、今度は抵抗も示さず若者の手に抱きとられ、黙って横たわっている。——まるで、生贄の子豚か何かのように。そう思った瞬間、母親の意識は性的な呪縛から解放されていた。

「何をなさるんです!？」

と叫んで駆け寄ろうとした。黒いインバネスが、息子の上に屈み込んだからだ。黒皮の手袋をはめた指が飲み屋から借りてきた毛布をずらし、息子の裸の腹にあてられた。

「何をなさるんです!？」

黒い肩を擱んだ。相手の左手が下がった——と眼の隅に捉えた次の瞬間、母親の身体は動かなくなつた。

「しばらく、お静かに」

と屈み込んで男が告げた。

「一体——何を？」

母親は声をふり絞った。かろうじて、それこそ蚊の鳴くような声が出た。

「治療です」

「そんな——それなら、なぜ、さつき、して下さらなかつたの？」

「人目がありました。治療の結果はすぐに表われる。見られぬ方が、お互いのためです」

その間、男の両手指は、軽やかに子供の丸いお腹の上を往来していたが、ある一点でびたりと停止した。

人さし指が二本——臍へその右上、五、六センチのあたりを指している。

「治療点はこちら。——すぐに済みます」

男がそう告げた瞬間、奇怪な現象が生じた。

横たわっていた子供が、いきなり、支えもなく、ブリッジの要領で反り返つたのである。

「あっ!？」

とあげた声を、母親は意識しなかつた。子供がその胸に——どうやったのかは不明のまま飛びついてきたからだ。

小さな両腕が母親の首に巻かれ、唇が重なった。——はっとした刹那せつな、接触感急速に遠去かつた。

こちらへ向き直つた男の人さし指が、肩胛骨の間に触れている。

人形みたいに落ちた小さな身体を男が抱き止め、流れるように若者の腿のベッドに載せ

た。

貫くような眼で子供を凝視し、

「しくじったな」

と言った。

子供はびくりとも動かない。

その丸まっつい可愛いお腹に、びたりと男の右の人さし指があてがわれた。あの点に寸分の狂いもなく。

「治療完了」

指がその第二関節まで食いこむのが早かったか、そのひとことが早かったか。子供がかつと口を開けるや、何やら青白い塊りが飛び出した——ように母親には見えた。

次の瞬間、若者が右手をのぼして、それをすくい取ったように見えた。

手は顎のあたりをかすめて、子供の方へのび、若者は彼を抱えてすつと立ち上がった。

「どうなさいました？」

と小柄な男が母親に尋ねた。女は蒼白であった。

「いまのは——何？ あの白っぽい塊の中に、確かに眼も鼻も口も見えた。なんて怖い顔

——あんなものが、克則の中に入っていたの？」

「あなたの中にも入ろうとしましたよ」

男が近づき、母親の右手を取って、人さし指の先をつまんだ。とたんに、金縛りが解けた。

若者の腕からひったくるように子供を抱き取った母親にはよく聞き分けられなかったが、男は次のようにつづけたのである。

「さっきのキスが子供のものだとは思えなかったでしょう。奴は古井戸の中で、同じ方法で坊やの中に入りこみ、地上へ出る機会を狙っていたのです。古い場所にはえてして、このような奴が巢食っているものです。その大半は人間の魂よりも弱い奴らですから憑かれてもどろろということはありませんし、霊格の高い寺や神社などに潜む連中は、力を奪われた抜け殻みたいなものです。しかし、中には力を持つ奴らがいる。魔性のものが。お子さんに取り憑いた奴もそのひとつです。だからこそ、お子さんは溺れずに済んだ。子供たちは覚えていませんし、誰も想像もつきませんが、恐らく、鉄の蓋を外したのは彼ら自身でしょう。彼らを操り、何十キロもある鉄板を動かすだけの力を發揮させるために、そいつは何百年も暗く冷たい井戸の底でパワーを貯えていたのです。子供たちはみな腕の筋肉を痛めているはずですよ」

「この子は……この子はもう……」

ようやく母親はすべてが無事に終焉しゆうえんしたことを知った。

「ご安心なさい。私はそいつを揉み出しました。二度とこの世に現われることはありません。」

坊やは以前と少しも変わりなく成長するでしょう。——気になるなら、お父さんにも祓はらってもらいなさい。清雅神社は靈格が高い一社です。——では」

一礼して男と若者は背を向けた。母親は、小路の出入口から車のノーズがのぞいているの気がついた。

頭の中をあの——ぞつとするような考えが横切り、母親は遠去かる影たちの後ろ姿に向かつて声を張り上げた。

「どうして——どうして、うちの子が狙われたのでしょうか？」

「あの井戸の由来を調べてみなければわかりませんが」と声が返ってきた。

「清雅神社が設けられたのは、あいつを封じるためであったのかも知れません。だとすれば、長い間、あいつを支えていたものは、神社に対する憎しみだったと考えられませんか。あのまま坊やを連れ帰れば、いつか——お父上が亡くなった頃にでも、火災か殺人のような形をとって、魔性のものによる不幸がみなさんを襲ったにちがいありません」

声もなく立ちすくんだまま、母親は二人が車の向うに消え、黒塗りの車体が動き出すのを見送った。胸の中で、息子は安らかな寝息をたてている。母親はそつと手を合わせた。もはや夕暮とはいえない墨色の小路で、寂しげな街灯の光に照らし出されたその姿は、平穩と安らぎに満ちた母子像のようであった。

午後八時。四条河原町にあるキャバクラ「オールナイト」は、二人のともない客のため、混迷のどん底にあった。

ボーラー・ハットにインパネス、ステッキ付きのおっさんが、眼を剝くばかりのハンサムをお供に来店したと思いきや、

「おお、別嬪べっぴんが揃つとるな。おい、そこにいる姐ちゃん、右から左までひと揃い、連れてこいや」

こりや服装から見て田舎の小金持ちか何かだと、ほくほく顔のマネージャーが、いやよ、あんなチビのおっさんと渋るホステス全員を、筆むしり取つてきなはれ、と席に着かせたのが、騒ぎのはじまりで、このおっさん、田舎ものかどうかは別として、こら、チップははずまんが、ブラジャーぐらい脱がんかい、なに、おっぱいに触っちゃいかん、なら指入れさせると狼藉ろうぜきものもいところ。

「やめなはれ」

「いじらんといて、いけず」

「匂においかいだら、あきまへん」

七色の照明の下で、めくり上げられたドレスから生々しい太腿はのぞくわ、Tバックに包